

2) センブリ=千振

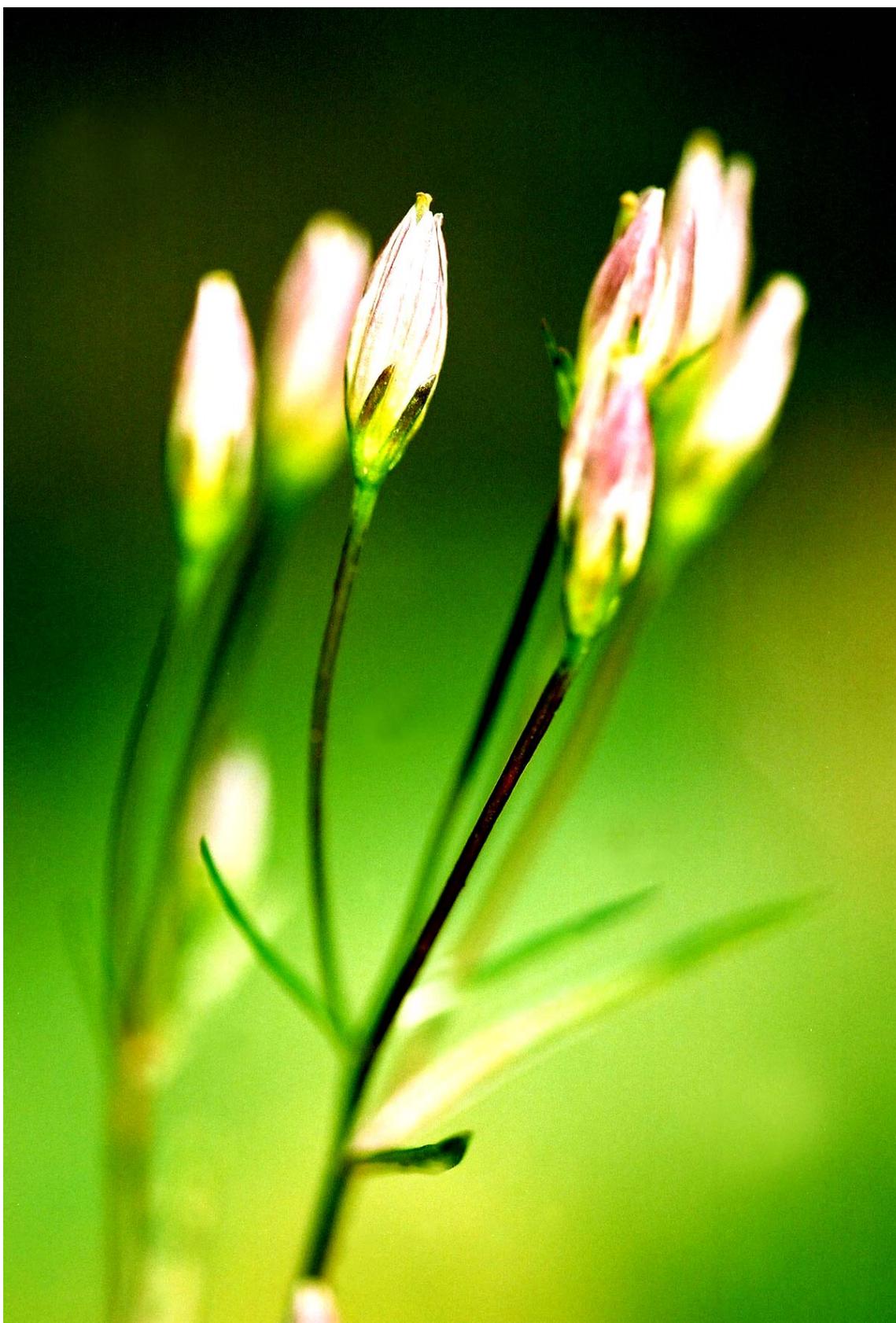
センブリはリンドウ科の2年草で、日本の特産種である。北海道の渡島半島から本州、九州にいたる陽当たりの良い草地に生える。茎は四角柱状で暗紫色を帯びて直立し、高さは20~25cmになる。葉は長さ3cmほどの細い線形で柄はなく対生する。秋、枝先や葉腋に白色で紫色の線状脈がはいった小花を多数開く。果実は球形の蒴果で小さく多数できる。全草に苦みがあり、漢方では植物全体を乾燥させて、苦味健胃薬として食欲不振、消化不良、胸やけなどの治療に用いる。近縁の種にはムラサキセンブリやイヌセンブリなどがあり、どれも薬効があることで知られている。ムラサキセンブリは、日本のほか朝鮮半島、中国、アムール地方に分布し、草丈はセンブリよりもずっと大きいものの、苦味成分は乏しく、日本ではあまり用いられていない。しかし中国ではこれを健胃、利尿剤のほか、消化不良、胃炎、黄疸、肝炎、歯痛、口内炎などの治療に利用してきた。一方イヌセンブリには苦味はなく、日本では薬用にされることはないが、中国では解毒剤として、また咽喉炎、扁桃腺炎、結膜炎などの治療に用いている。和名の由来は、湯の中で千回振り出しても、まだ苦味が残るところから名付けられたとされ、50万倍に希釈しても苦味が残るといふ。江戸時代の中期、正徳3年(1713年)に著わされた『和漢三才図会』には、「当薬(トウヤク)正字ハ未詳 俗ニ云フ、世牟不利(セブリ)」と記されており、この和名は後世になってつけられたものと思われる。別称としてはトウヤク、ヤクソー、イシャダオシ、クスリクサ、ヒンワリ、センフィなどがあり、ほとんど薬に関する名称である。学名は『*Swertia japonica*』で、属名はオランダの植物学者 E.スベルト氏の名に因む。

センブリの採取は10月中下旬の開花期に行なう。全草を抜き取り、水洗せずに土をよく落としてから陰干しにする。茎が容易に折れるぐらいになるまで乾燥させて、袋に入れて保存する。センブリの薬効成分は、苦味配糖体の『スェルチアマリン』『スェロサイド』『ゲンチオピクロサイド』などである。良薬は口に苦しという諺はセンブリのためにあるようなもので、漢方では当薬(トウヤク)とあって、古くから健胃剤として用いてきた。『大和本草』には「せんぶりたうやくとも云。白花咲く。又淡紫花あり。白花の者尤も苦し。山に生ず。小草也。高さ五六寸に過ぎず。葉は龍胆に似て小なり。葉も花もきはめて苦し。虫をころす。」と記されており、淡紫花は園芸品として観賞用に栽培されている。

センブリには近年、発毛作用のあることが確認され、煎液を頭部に塗布したり、ヘアトニックなど髪料の原料にも用いられている。外国で開発された『リアップ』は別にしても、日本の化粧品会社から発売されている養毛剤のどれをとっても、このセンブリが用いられているので、一度、成分一覧を覗いてみることをお勧めしたい。またセンブリには二日酔いの予防効果があるばかりか、『大和本草』に「虫を殺す」と記されているように、回虫や蟻虫の駆除効果もあるといわれている。



意外に美しいセンブリの花、苦味が嘘のようである(東京都小平市薬用植物園)。



淡紅紫色のセンブリの蕾(東京都小平市薬用植物園)。



淡紫色のセンブリの花、観賞用としても植えられる(小平市薬用植物園)。

[目次に戻る](#)